

私中心の 人間中心の
ものの見方が
「あいにくの天気」と、
言わしめている

2007（平成19年）6月

6月は、梅雨の季節。
雨の中で人に会うと「あいにくのお天気ですね」と言葉を交す。
あいにくと決めているのは、誰だろう？
他ならぬ自分にとって都合が悪いから「あいにく」と決めてかかっているだけじゃないか。梅雨に雨が降らなければ、木々は潤いをなくし、夏の日照に水不足になるに違いない。雨はお天とう様の都合で降っているのだ。
私たちは、そういう計らいの中に生かしていただいているのではないか。

「雨の日には、雨の風情あり」
そういう余裕をもった心境で、梅雨を過ごしたい。 合掌

「盆まいり」
子供のころ
父母に連れられ
手を合わせた日
父母は何を祈ってくれて
いたんだろう

2007（平成19年）7月

7月、8月は、お盆の季節です。
いろんな理屈など考えずに素直な心で、手を合わすことのできた子供のころ。
そういえばあの時、父や母は、神妙な顔をして祈っていたものです。
他なりません、親が祈っていたのは、この私たちの行く末を案じてのことではな
かったでしょうか。死はすべての終わりではなく、仏さまの世界に今もおられる
父や母なら、今も私たちが祈っていてくださるはずです。
その仏さまの心を汲み取ることのできる生き方を
「思いやりのある人生」というのではないのでしょうか。 合掌

「いのちの響き合い」
蝉のなく声
小川のせせらぎ
そよぐ風の音
みんな私のなかの鼓動や
血の流れと
響き合って聞こえてくる
いのちの音だ

2007（平成19年）8月

暑い日が続きますが、この季節は、ふだんあまり聞くことのない「いのちの音」に出会うことができます。

蝉のなく声、小川のせせらぎ、風や雨の音などです。

しかしよく耳を澄ませしてみると、私のなかの心臓の鼓動や、血の流れも一緒に音をたてているのに気づかされます。

自然の営みのなかに私たちのいのちは生かされており、私のいのちと他の生きとし生けるもののいのちは、たがいに響き合って「今このとき」は、与えられているのです。

いのちの音を耳にしたとき、どうぞ私のいのちを頂くことのできている尊さを思い起こしてみてください。 合掌

「佛光の尊さ」
おのが目の
力で見ると思うなよ
月の光で
月を見るなり

2007（平成19年）9月

朝夕、だいぶ涼しい季節になってきました。9月はお彼岸月。
仏さまとまたご縁を結べる月です。
もう一つ9月の行事といえば「お月見」があります。
しかしよく考えて見ましょう。
私たちは、私たちの力でもって物事を見ているのでしょうか？
どんなに視力の良い人でも、真っ暗闇では何も見ることはできません。
目を悪くされた方が「光を失った」と漏らされるのを耳にしたことがあります。
実は私たちが当たり前のように感じているこの世界も、かけがえのない光に満ち
溢れているからこそ、ものを見るということが出来るのです。
それは私たちの力ではなく、与えられたものと受けとめることができます。

どうぞ月の美しさを感じながら、わがいのちが仏さまの光に照らされてある
尊さを実感していただきたいと思います。 合掌

実るほど
頭を下げる
稲穂かな

2007（平成19年）10月

食欲の秋、健康の秋、読書の秋、秋にはさまざまな冠詞が付きまします。
食欲の秋については、やはり「実りの秋」があってこそそのものといえるでしょう。

日本人にとっては、稲がなってお米が収穫されます。
昔の人は、このお米が実を結べば結ぶほど頭を下げる姿を表して、人間的に実りの多い人ほど、謙虚に素直に頭を下げると言い表したわけです。

お釈迦様は、「自分を見る」ということをすすめました。自分がどのような人間であるか知ることが、幸せを実感することのできる生き方につながると説いたのです。静に振り返ってみると、人の助けを頂いて成し遂げたことのなんと多いことでしょうか。私が、私が、と威張るような生き方よりも、おかげさまでと頭を下げながら生きる生き方を心がけたいものです。

洋の東西を越えて、秋には収穫にまつわるお祈りの行事がいろいろとあります。それらは単に食べる物を収穫できたという喜びだけではなく、私たちのこの命が「無事に生かされていること」を感謝し、祈りがあることを忘れてはならないと思うのです。 合掌

寝ていても
運ばれて行く
夜汽車かな
＜澤木興道老師の言葉＞

2007（平成19年）11月

飛行機や新幹線の発達した今日では、夜行列車を利用することは、昔に比べたら少なくなったことでしょう。

夕方乗り込むと、眠っているうちに目的地まで運んでくれる夜汽車は有り難いと受け取れます。しかし澤木興道老師は、そういった意味でこの言葉を示したわけではないと思うのです。

夜汽車の終着駅は、私たちの人生の終わりであり、運ばれているのは、我々のいのちです。

「寝ていても」というのは、人生夢うつつのうちに過ごしてしまったというように、人生の真理や私の生きる意味に気づくことなく、人生を眠ったまま過ごしても、いつの間にか死を迎えなければならないことへ警鐘を鳴らす詩句と受けとめたいと思います。

さて私たちは、あとどれくらい生きられるのでしょうか。
自分のものでありながら、誰にもわからないのが、このいのちの時間です。寝ている間に終着駅に運ばれて行くのではなく、やはり与えられた時間の少ないことに気づいた上で、窓の外の情景を楽しみながら、人生の旅を共に続ける大事な人と語り合いながら、「大切な時間」をいとおしみつつ過ごすことができるよう、生きていきたいものです。

人生のほんとうの意味に目覚めることこそ、
お釈迦様の伝えたかったメッセージです。 合掌

新年の希望は
今年の反省と
感謝があつて
かなえられる

2007（平成19年）12月

今年も残りわずかになってきました。

若い方はもちろんのこと、年老いた方でも新しい年は、何か新しい希望が湧いてくるような気がします。

しかし今年のことになかったことになり、全く新しい一年がおとずれるのかといえさうではありません。

「すべてのものはつながっている」とお釈迦様は教えてくれている通り、今年までの積み重ねが結果を出すのが新しい年といっても過言ではないでしょう。

逆に言えば、新しい年の種はすでに蒔かれ終わったともいえましょう。

古来より日本人は「往く年、来る年」を除夜の鐘の響きのなかに惜しみながら過ごしたものです。そこには今年過ごした時間、しいて言えば過ぎ行く我々のいのちを大切に振り返ることをしてきた日本人の精神文化があります。

新しき年に何かを求めようとするならば、希望を抱くのであれば、まず今年の内には私たちの暮らしをしっかりと振り返り、反省し、いろいろなことはあったことであろうが、今年も無事に一年を終えられることに対して、感謝の心を仏さまに捧げ、新しい年を迎えるべきでありましょう。

いい歳をお迎えくださることを、陰ながらお祈りしています。 合掌